



心身癒やす「園芸療法」

植物に触れ、リハビリ



小石さん(大短大)普及目指す

【大分】大分短期大(大分市千代町)園芸科助教の小石鉄兵さん(39)は、障害者や病気の人のリハビリに園芸を取り入れた「園芸療法」の普及に努めている。早稲田大の招聘研究員でもあり、一昨年から社会科学部の学生有志と県内で年1回のPRイベントを開催。花と緑による癒やし効果を広めている。

小石さんによると、園芸療法は米国や欧州で発展した。日本では1995年の阪神大震災を契機に広がった。兵庫県で99年に園芸療法の普及に努めている。園芸療法士(民間資格)の職員を採用し、系列の介護福祉施設で高齢者の機能回復に園芸を取り入れている。小石さんは宇佐市安心院町出身。大学卒業後、作業療法士の国家資格を取り、大分市内の脳神経外科病院に8年間勤めた。患者と向き合った経験を生かそうと、教育現場へ。14年から同短大で教壇に立ち、植物から受ける刺激を心身機能の維持、回復、生活の向上につなげる療法などを教えている。

写真は早稲田大と一緒に園芸療法合同ゼミナールを開いている大分短期大の小石鉄兵助教(右から2人目)と学生ら

「障害者や高齢者が「受け身」の植物と触れ合うことで、心の安定や生きがいにつながる。園芸療法を広く知ってもらい、農業と福祉が連携する健康的な社会づくりに貢献したい」と話している。(坂本陽子)

療法の国家資格を取り、大分市内の脳神経外科病院に8年間勤めた。患者と向き合った経験を生かそうと、教育現場へ。14年から同短大で教壇に立ち、植物から受ける刺激を心身機能の維持、回復、生活の向上につなげる療法などを教えている。

早大との縁は18年、J.A共済連(東京)が早大に提供した寄付講座「農からの地方創生」(国東市など)への参加がきっかけ。昨年は早大と同短大の学生有志計20人による園芸療法合同ゼミナールが発足。大分市の大型商業施設で体験型イベントを催し、2日間で延べ約1400人を集めた。

今秋は新型コロナウイルス感染症拡大を受け、同短大単独で開催予定。同市の県社会福祉介護研修センターでも講師を務める小石さん

大分短期大園芸科助教の小石鉄平さん(39)は、障害者や病気の人のリハビリに園芸を取り入れた「園芸療法」の普及に努めています。

2020年7月16日付
大分合同新聞 13面

①園芸療法が日本で広がる契機となった出来事は何でしょう？その後、兵庫県ではどのような取り組みが行われてきましたか？

1995年の阪神大震災を契機に広がった。兵庫県では99年に園芸療法課程のある県立淡路景観園芸学校が設立された。2015年にはJ.A兵庫南が園芸療法士の職員を採用。系列の介護福祉施設で高齢者の機能回復に園芸を取り入れている。

②病院に勤務していた小石さんが教育現場に移った理由は何ですか？大分短期大ではどんなことを教えていますか？

作業療法士として患者と向き合った経験を生かそうと教育現場へ。植物から受ける刺激を心身機能の維持、回復、生活の向上につなげる療法などを教えている。

③早稲田大と一緒に取り組んでいる活動はどんなものですか？

一昨年から社会科学部の学生有志と県内で年1回のPRイベントを開催。花と緑による癒やし効果を広めている。

④小石さんは園芸療法の意義や目標について何と話していますか？

「障害者や高齢者が「受け身」の植物と触れ合うことで、心の安定や生きがいにつながる。園芸療法を広く知ってもらい、農業と福祉が連携する健康的な社会づくりに貢献したい」